

「冒険王」「新・冒険王」

(青年団)

演劇



「新・冒険王」 青木司撮影

居場所持たない青春群像

平田オリザの「冒険王」は、1980年のイスタンブールの、一部屋に何人も宿泊者がいる安宿を舞台に、日本を飛び出し、海外を長期間放浪する若者たちの日常を切り取った作品だ。彼らは、日本にも海外にも「居場所」を持たない人たちで、ときどき働いて金を貯めては、日本人が集ま

る安宿を中心に旅を続ける。なぜ旅行するのかについて、まだ出ていない何かを「ダラダラ待って」という台詞は、「モラリアム人間の時代」という言葉が流行った当時の若者の心情を良く伝えている。20年後、2002年の日韓共催ワールドカップで、韓国・イタリヤ戦がなされ

ているその時間の同じ安宿の様子を描くのが「新・冒険王」で、韓国の「第12言語演劇スタジオ」のソン・ギウンとの共作。こちらでは日韓両方の若者のお互いに対する微妙にすれ違った意識が面白い。イタリヤに勝ちそうな韓国を同室の韓国人と一緒に応援することへの日本人たちの距離感の違いに、日韓の歴史的問題が圧縮される。トルコによる民族虐殺の被害を受けたアルメニア系のアメリカ人の視点によって、物語は興行きを深めてゆく。

劇的な事件が起きず、同時になされる複数の会話の意味や意識の齟齬がそのまま観客への問いかけとなる。平田独特の世界は、ソンの共同脚本・共同演出による2カ国語上演で一層効果的に実現された。両作品で女性客を演じ、それぞれの役の異なった切なさを激することなく伝えた村井まどかがとりわけ印象的。

(北野雅弘・演劇学研究者)
29日まで、東京・吉祥寺シアター